

シバ

JACK HIGGINS

Sheba

謀略の神殿

ジャック・ヒギンズ 黒原敏行 訳



シノバ 謀略の神殿



Hayakawa Novels

訳者略歴 1957年生，東京大学法学部卒，
英米文学翻訳家 訳書『密約の地』ジャ
ック・ヒギンズ，『越境』コーマック・
マッカーシー，『ビッグ・タウン』ダグ
・J・スワンソン（以上早川書房刊）他
多数

シバ ^{ぼうりやく しんでん} 謀略の神殿

1997年 3月10日 初版印刷
1997年 3月15日 初版発行

著 者 ジャック・ヒギンズ

訳 者 ^{くろ はら とし ゆき} 黒 原 敏 行

発行者 早 川 浩

発行所 株式会社 早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話 03-3252-3111(大代表)
振替 00160-3-47799

印刷所 中央精版印刷株式会社
製本所 中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-15-208068-X C0097

Printed and bound in Japan

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

シ
バ

謀略の神殿

SHEBA

by

Jack Higgins

Copyright © 1994 by

Jack Higgins

Translated by

Toshiyuki Kurohara

First published 1997 in Japan by

Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan by

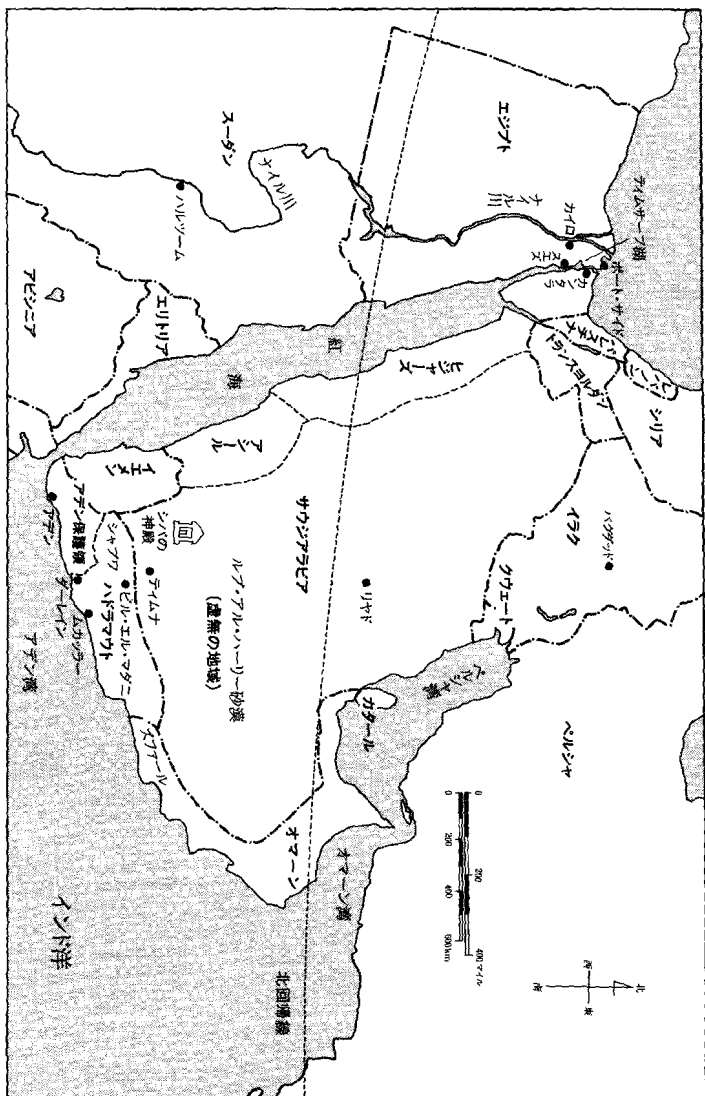
arrangement with

Septembertide Publishing BV.

c/o Ed Victor Ltd.

through The Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

紀元前二十四年、ローマ帝国の將軍アエリウス・ガルスは、南アラビアを征服しようとし、一時は成功したかに見えたが、結局は〈虚無の地域〉として知られる恐ろしい土地、ルブ・アル・ハリー砂漠で兵の大半を失った。生き残った者の中に、第十軍団の百人隊長をつとめたアレクシアスというギリシャ人がいた。砂漠から徒歩で生還した彼は、ソロモン王の洞窟に優るとも劣らぬ驚くべき古代世界の秘密を胸中に秘めていた。その秘密は二千年のあいだ誰にも知られずにきたのだが……。



登場人物

ギャヴィン・ケイン	アメリカ人船長。考古学者
ピルー	ケインの部下
マリー・ペレ	ペレ商会の経営者
ジャマル	マリーの使用人
ジョン・カニンガム	イギリス人考古学者
ルース・カニンガム	ジョンの妻
ジョーダン	アメリカ人地質学者
カナリス	ドイツ国防軍情報局長官
ハンス・リッター	カナリスの補佐官
カルロス・ロメロ	親衛隊の連絡機パイロット
オットー・ムラー	ベルリン大学の考古学教授
スキロス	ホテルのオーナー
ゴンザレス	ダーレインの税関長
オマール・ビン・ナセル	ビル・エル・マダニの村長
マームード	バル・ハリス族の族長
セリム	アラブ人の悪党

ベルリン

一九三九年三月

三月末日の夕刻、大きなカーテンを引いたように雨が降るベルリンのヴィルヘルム通りを、一台の黒いメルセデスのリムジンが新しい首相官邸に向かっていた。官邸はこの一月に竣工したばかりである。ヒトラーは一年以内の完成を命じたが、その命令は、二週間の余裕を残して守られていた。国防軍情報局アプヴェールの長官、カナリス提督は、身を乗り出して車の窓をあけ、官邸を眺めた。

提督は首を振った。「すごいものだ、ハンス。フォス通りに面した側だけで、四百メートルあるそうだ」

かたわらに坐っている若い男は、提督の補佐官、ハンス・リッター空軍大尉である。第一等および第二等鉄十字章を受勲した、端正な顔立ちの男だが、横顔をさらすと、右頬の痛ましい火傷の痕があらわになる。足もとの床にはステッキをついている。スペイン内戦に、ドイツが派遣したコンドル軍団の一員として従軍したさい、不運にもアメリカ人の義勇軍パイロットに撃墜されたためである。

「立派な柱といい、美しい大理石といい、まるで古代ローマの壮麗な建築のようですね、提督」

「新秩序の象徴というよりも？」カナリスは肩をすくめ、窓を巻きあげた。「あらゆる帝国はいつか滅びるのだ、ハンス。第三帝国とて例外ではない。われらが総統閣下は、千年王国を約束しておられるがね」カナリスはシガレット・ケースから煙草をとりだした。リッターは火を差し出しながら、提督の茶化すような口調に、例によってかすかな危惧を覚えた。

「そういうものでしょうか、提督」

「そうだと。不思議な気がしないかね？　いつかおおぜいの観光客がこの官邸を訪れるようになる。彼らは、ちやうどエジプトのルクソール宮殿を見物するときのように、こう言うのだ。『この時代の人たちは、どんなふうだったのだろう？』と」

リッターはひどく落ちつかない気分になった。やがてリムジンは金色の門をくぐり、広い前庭を横切って、重厚な造りの正面玄関に向かった。「今日なぜ呼ばれたのか、提督はご存知なのですか？」「見当もつかん。しかし、呼ばれたのはわたしだ、ハンス。きみではない。きみには何か用ができたときのために、ついてきてもらったただけだ」

「わたしは車でお待ちしますか？」車が玄関前で停止すると、リッターは訊いた。

「いや、玄関ホールで待ちたまえ。あそこのほうが居心地がいいし、第三帝国の新しい芸術様式が鑑賞できる。俗悪なしなものだが、景気のいい気分にはなれる」

運転手をつとめる海軍軍曹が車からおりて、後部座席のドアをあけた。カナリスは先におり、足の悪いリッターを待つ。リッターの左脚は膝から下が偽足である。だが、いったん車からおりると、ステッキの助けを借りてきびきびと歩くことができた。ふたりは階段をあがっていった。

玄関を守るのは（親衛連隊アドルフ・ヒトラー）の隊員で、黒い制服に白革のハーネスで身を固めていた。彼らは建物に入るカナリスとリッターにきつと敬礼をした。ホールは見事なものだった。床はモザイク張りで、どのドアも高さが五メートルあり、鉤十字をつかんだ鷲の紋章がついていた。金色の机に、黒い制服を着た親衛隊の若い大尉が坐っていた。背後には警備兵がふたり控えている。大尉はさつと立ちあがった。

「提督。総統は二度、使者を出されましたよ」

「しかし、ホッフアー、連絡を受けたのは、つい半時間前なのだ」カナリスは応えた。「まあ、そんな言い訳は通用せんだろうがね。これはわたしの補佐官のリッター大尉だ。ここで待たせるから、よろしく頼むぞ」

「わかりました、提督」ホッフアーは警備兵のひとりに顎で合図した。「提督を総統閣下の面会室にご案内しろ」

警備兵が足早に歩きだすあとへ、カナリスはついていった。ホッフアーが机のうしろから出てきて、リッターに訊いた。「スペインか？」

「ああ」リッターは偽足にはかせた靴の裏を床に打ちつけた。「今でもまだ飛べるが、飛ばせてくれない」

「それは残念だな」ホッフアーはそう言って、リッターをソファが置かれている一角へ誘った。^{いざな}「華麗なショーを見られないわけだ」

「そういうショーがあると思うか？」リッターは腰をおろし、シガレット・ケースをとりだした。

「きみはそうは思わんのか？　ときに、ここは禁煙だ。総統閣下のご命令でね」

「くそ！」リッターは言った。煙草を吸えば、脚の痛みがまぎれるのだ。

「悪いな」ホッファーの声には同情がこもっていた。「しかし、コーヒーは飲める。とびきりうまいぞ」

ホッファーはくると背を向けて机に戻り、電話の受話器をあげた。

警備兵が面会室のドアをあけたとき、中に人が何人もいるのに、カナリスは驚いた。三軍の総司令官がいた。空軍がゲーリング、陸軍がブラウヒツチュ、海軍がレーダーである。親衛隊隊長ヒムラーがいて、フォン・リッペントロップ外相がいて、ヨードル、カイテル、ハルダーといった將軍たちがいた。室内には重い沈黙がおりていた。カナリスが入っていくと、みなが顔を向けてきた。

「ようやく提督のお出ました。これで始められる」ヒトラーが言った。「手短かに話そう。諸君も知ってのとおり、今日イギリスがポーランドに、開戦の暁には全面支持をするとの保証を与えた」

ゲーリングが口をはさんだ。「フランスも同調する見込みですか、総統閣下？」

「おそらくするだろう」ヒトラーは答えた。「だが、一気にことを運べば、両国とも何もしないはずだ」

「ポーランドに進攻するのですか？」陸軍参謀総長ハルダーが訊いた。「その場合、ソ連はどう出ます？」

「干渉はすまい。今、交渉中だと言っておこう。というわけで諸君、この問題に関しては、わたしの

意向は固まっている。諸君は〈白色作戦〉の準備にとりかかってくれたまえ。九月一日を期して、ポーランドに攻めこむのだ」

一同は衝撃のあまり息をのんだ。「しかし、総統閣下。それでは六カ月しかありません」ブラウヒツチュ陸軍総司令官が言った。

「それで充分だ」ヒトラーは応えた。「異論があるなら、今述べたまえ」深い沈黙が室内を領した。「よろしい。では諸君、さっそく仕事にかかるのだ。提督、きみだけ残ってくれ」

ほかの者が退室するあいだ、カナリスはじっと立って待っていた。ヒトラーは窓外の雨を眺めている。が、やがて向き直って、言った。「英仏は、一応宣戦布告はするだろうが、何もするまい。ちがうかね？」

「おっしゃるとおりです」カナリスは言った。

「われわれは数週間でポーランドを制圧する。そうなれば、もはや英仏には手の打ちようがない。きつと和平を求めてくるはずだ」

「もし求めてこなかったら？」

ヒトラーは肩をすくめた。「〈黄色作戦〉に進むまでだ。ベルギー、オランダ、フランスと進攻して、大陸に駐留するイギリス軍を海に追い落とす。そのころには連中も分別を取り戻すだろう。もともとイギリスとは、互いに相容れない敵同士ではない」

「そのとおりです」

「だからわたしは、できるだけ早い時期に、こちらが本気であることをイギリス人に知らせてやるべ

きだと思っている」

カナリスは咳払いをした。「つまり、どういうことでしょうか、総統閣下？」

ヒトラーは壁にかけた大きな世界地図を手で示した。「きたまえ、提督。説明しよう」

一時間後、カナリスは玄関ホールに戻ってきた。ホッフアーが、うしろにふたりの警備兵を立たせて、机についていた。リッターの姿は見えない。ホッフアーが席を立てて、やってきた。

「提督」

「わたしの補佐官は？」カナリスが訊く。

「リッター大尉は、どうしても煙草が吸いたいと言って、先に車に戻りました」

「やれやれ」カナリスは言った。「では、ひとりで出ていくか」

大きなドアをひらいて外に出て、レインコートのボタンをかけながら、雨の落ちてくる空を振りまわった。階段をおりて、運転手が気づくのを待たず、自分で後部のドアをあけ、リッターの隣に乗りこんだ。

「本部へやってくれ」運転手に命じて、ガラスの仕切りを閉じた。

走りだす車の中で、リッターは煙草をもみ消そうとした。カナリスは座席にもたれかかった。「消さなくていい。わたしにも一本くれ。吸いたい気分だ」

リッターはシガレット・ケースを出し、提督がくわえた煙草に火をつけた。「どうでした、提督？ ほかの方が先に出てきたので、心配していたのですが」